# 最終報告書レポート

## プロジェクト「タイ、カンボジア、ラオス、ミャンマーで映画製作・上映のコラボレーションを育成する」の活動成果報告

---

## 1　活動概要

2016 年 12 月～2017 年 1 月、メコン広域圏の首都を中心に 7 都市を 6 週間周遊するなかで、映画（特にインディペンデント映画）の製作や上映の現状と関係者の暮らしぶりを調査した。活動内容は主に関係者との面談や会食、映画の製作・上映の現場の視察、関係機関の見学とした。

ラオス、ミャンマー、カンボジア、と国ごとに事情は少しずつ違うが、次の特徴に注目した。（詳細は 3 に記述）

① 40～50 代の不在
② スマホとネット、シネコンの普及
③ 映画祭が活発
④ 短編から長編映画を目指す世代の台頭
⑤ ドキュメンタリーは国内上映の機会は少なく、制作・上映とも外国依存が強い
⑥ 各国政府が映画に乗り出し始めた

また、滞在した先々で 1964 年の日本ドキュメンタリー「ドキュメント：路上」（監督：土本典昭、英語字幕版）の無料上映会を解説つきで行い、東京オリンピック直前の東京の様子やインディペンデント映画監督がスポンサー映画を作ることのジレンマについて討論を促した。

その後は、滞在中に見聞きしたこと、経験したことを元に、当地で活動する人たちとドキュメンタリーの製作・上映・保存・普及を進めるプロジェクトを構想し始めている。

## 2　活動記録

**フェローシップ期間：12/1/2016～1/15/2017**

| | | |
|---|---|---|
| 12/1 | **東京＝ハノイ＝ヴィエンチャン**（NH857, QV312） | Vientianne |
| 12/2 | ブルネイから来訪映画クルーの撮影現場を見学（Regal Blue Productions） | |
| 12/3 | **ヴィエンチャン＝サイニャブリ**（乗り合いヴァン）<br>海外協力隊の皆さんの活動視察、交流 | Sayabouly |
| 12/4 | ビエンゲオ村で綿花の藍染と織の作業工程撮影に同行。村人の歓迎交流会 | |
| 12/5 | ビエンゲオ村での撮影に同行<br>**サイニャブリ＝ルアンパバーン**（乗り合いバス） | Luan Prabang |
| 12/6 | ルアンパバーン国際映画祭　シンポジウム、タイやシンガポールのドキュメンタリー「The Scala」他、ベトナム映画「Sweet Twenty」日ラ合作「ラオス　竜の奇跡」のプレミア上映、スタッフと交流会 | |
| 12/7 | 古典ドキュメンタリー「Chang」（1925） | |
| 12/9 | **ルアンパバーン＝ヴィエンチャン**（QV53）<br>国際交流基金ヴィエンチャン連絡室訪問　内田裕氏とランチ<br>映画館・DVD ショップを視察（JF スタッフ・Oland 氏案内） | Vientianne |
| 12/10 | 現地で短編映画を作る Hans Kaufman 氏を訪問 | |
| 12/11 | ヴィエンチャン映画祭 Hélène Ouvrard 氏、ドキュメンタリー制作者 Kham Induangchanthy 氏とランチ MTG<br>シネコンで「Twenty Again」（タイ映画、英語・ラオ語字幕） | |
| 12/12 | 映画の不定期上映をしているカフェ「Baan Ton Mali」訪問<br>人形アニメ制作者 Souliya Phoumivong 氏とラオス国立美術学院、自宅兼スタジオを訪問 | |
| 12/13 | 映画監督 Som Ock Suthipong 氏の経営する菓子店を訪問<br>JICA 前納加奈子氏と MTG<br>国立美大マスコミ専攻の映像製作者 Nirankoon Singprasouth 氏、Lao New Wave Cinema の Vannaphone (Kino) Sitthirath 氏と MTG | |
| 12/14 | **ヴィエンチャン＝バンコク＝ヤンゴン**（TG571, TG305） | Yangon |
| 12/15 | Thamada Cinema でミャンマーのコメディ映画を見る<br>清恵子氏と夕食、DVD ショップへ | |
| 12/16 | Yangon Film School 訪問 | |
| 12/17 | Myat Noe 氏と MTG | |
| 12/18 | Aungmin 氏、Aung Khine Myo 氏、清恵子氏と MTG<br>Watthan Film Festival オフィスを訪問、Thaidii 氏、Thuthu Shein 氏と MTG | |

| | | |
|---|---|---|
| 12/19 | 国際交流基金 Japan Culture House 訪問<br>映画製作会社街 35 St.を見物、映画館街を見物<br>若手ドキュメンタリスト Waimar Nyunt 氏と MTG、作品を見せてもらう | |
| 12/20 | Aungmin 氏、Okkar Maung 氏の案内で Myanmar Motion Picture Organization と Film Archive を訪問<br>Watthan Film Festival オフィスで若手ドキュメンタリストに山形映画祭や世界の映画祭事情についてミニレクチャー | |
| 12/21 | **ヤンゴン＝バンコク＝チェンマイ**（TG302, TG120） | Chiang Mai |
| 12/22 | Som Supaparinya 氏と打ち合わせ MTG | |
| 12/23 | Asian Culture Station で「ドキュメント路上」上映とミニレクチャー、地元アーティストと交流会 | |
| 12/24 | チェンマイ大学キャンパスの屋外上映会<br>Apichatpong Weerasethakul 氏らと夕食 | |
| 12/25 | **チェンマイ＝バンコク**（TG103）<br>カフェ「Tearoom」で「ドキュメント路上」上映とミニレクチャー | Salaya |
| 12/26 | インディーズ・フィルムメーカーの大忘年会に参加 | Bangkok |
| 12/27 | ドキュメンタリー配給会社 Documentary Club の Thida Plitpholkarnpim 氏と MTG<br>アート系映画館 HOUSE で「By the Time It Gets Dark」を見る<br>ドキュメンタリーの定期上映をしているカフェバーI Hate Pigeons を訪問 | |
| 12/28 | 英字新聞 The Nation の編集委員 Kong Rithdee 氏、ドキュメンタリー作家 Panu Aree 氏とランチ。監督 Pimpaka Towira 氏と夕食 | |
| 12/29 | フィルムアーカイブで映画上映＆夜祭に参加 | Salaya |
| 12/30 | 8 ミリ映画作家 Mont Tesprateep 氏と MTG。「ドキュメント路上」をフィルムアーカイブスタッフのために上映、ミニレクチャー。<br>タイ映画上映＆夜祭に参加。 | |
| 12/31 | フィルムアーカイブの恒例年越し屋外上映会。 | |
| 1/4 | **バンコク＝プノンペン**（TG584） | Phnom Penh |
| 1/5 | Bophana Center 荒井和美氏訪問。Park Sungho 氏, Neang Kavich 氏, So Chandara 氏, Chan Lida 氏とランチ。Kavich 作品の撮影地 White Building 見物。Meta House でカンボジアについてのドキュメンタリーを鑑賞。 | |
| 1/6 | National Short Film Festival で若手作品上映＆トークを見る。<br>Pannasastra 大学でカンボジアロックについての「Don't Think I've Forgotten」上映会に行く。 | |

| | | |
|---|---|---|
| 1/7 | Institut Francais でアニメーション映画。元フィルムコミッション Sodara 氏とランチ MTG。National Short Film Festival の授賞式。 | |
| 1/10 | 国際交流基金アジアセンタープノンペン連絡事務所を訪問。カンボジア・フィルム・コミッションを訪問。配給会社 Sithen Sum 氏と Huy Yaleng 監督と MTG。 | |
| 1/11 | Bophana 荒井氏と MTG。新作カンボジア映画「Love 2 the Power of 4」のプレミアイベント・上映。 | |
| 1/12 | Bophana 撮影班に同行、クメールルージュ時代を扱った創作舞踊の公演前儀式の撮影。<br>Bophana Center で「ドキュメント路上」の上映＆ミニレクチャー。 | |
| 1/13 | 映画局の局長をインタビュー。映画館 Cine Lux 見学、Regent でカンボジアのコメディ＝ホラー映画「The Mummy」を見る。Institut Francais でアピチャッポン特集プレミア「光の墓」。映画撮影地 Diamond Island を関係者で訪問。 | |
| 1/14 | アピチャッポンのマスタークラス、CFC 主催昼食会、Bophana Center でカンボジア若手の短編映画。 | |
| 1/15 | ポスプロスタジオ Filmkhmer 訪問、菅野哲史氏と MTG。<br>**プノンペン＝東京**（NH818） | |

## 3　受け入れ機関との協同内容

【ラオス】映画製作会社ラオ・ニューウェーブ・シネマ：
ドキュメンタリー制作者のカイソンカーム・インドゥチャンティ（カーム）氏やワンナポーン・シッティラート（キノ）氏と面談し、日本との国際共同製作の経験談を聞き取り、今後どのような日本とのコラボレーションが可能かを話し合った。

【ミャンマー】ヤンゴン・フィルムスクール：
ローカル・ディレクターのミンキエウィッツ氏の案内で学校施設を訪問。ドキュメンタリー・アニメーションのワークショップを視察し、脚本ワークショップを見学。ワークショップ講師や生徒たちと話し合い、その実績や映画づくりに対する未来の理想について語り合った。

【タイ】タイ・フィルム・ファウンデーション：
チャリダー・ウアバムルンジット氏と「ドキュメント路上」の上映とトークイベントを共同企画。プログラミング・スタッフや一般客と話し合い、現在の東南アジアと日本の 1960 年代の社会状況やドキュメンタリー制作者の比較を通して考察した。スタッフとは年末年始を共にしながら、いまアジアで必要とされている事業は何かを話し合った。

【カンボジア】ボパナ映像視聴覚センター：
ソピアプ氏と面談、荒井和美氏にボパナセンターの案内、活動の説明を受けた。「ドキュメント路上」の上映とトークイベントを共同企画。今後山形国際ドキュメンタリー映画祭とボパナセンターとの協同事業の可能性について検討し始める。

## 5　ラオス、ミャンマー、カンボジアでの取材内容

### ① 歴史の分断、40〜50 代の不在

■　ラオス、ミャンマー、カンボジアのインディペンデント映画製作・上映で最も活動しているのは 20 代と 30 代だった。その上の世代の映画人は 60〜70 代で、政府映画局や映画製作者連盟のトップを務めている数人に接触した。40〜50 代はどうしてしまったのか？　その不在について、十分に聞き取りをすることができなかったが、1980〜2000 年代に内戦・圧政・経済困難で落ち込んでいた映画業界が、デジタル時代の到来と国際的な支援のおかげで近年にわかに活性化したことが想像できる。ミャンマーでは最近ベテラン映画人に向け「先の軍事政権に飼い慣らされていた」として批判する若者の声があがり、フェースブック上で世代間論争となったという。

■　1995 年に山形国際ドキュメンタリー映画祭へ「レヌテヌの独楽」を携えて来日した Som Ock Suthipong（1954 生）は、かつてカンヌで初めて上映されたラオス映画「レッド・ロータス」（1988）を監督した人。現在はラオス航空に仕出しするケーキ屋を経営し、ほとんど店に出ないで釣り、家で犬や鳥と過ごし、映画界を避けている。映画への政治介入に嫌気をさしての引きこもりではないかと憶測されていた。

■　映画史の世代分断のせいで、映画製作のノウハウを学ぼうとする若者は、独学か海外留学・外国人によるワークショップで身につけていく。映画史も継承されず危機にあるが、ミャンマーでは、放置されているフィルムアーカイブを整備して古いフィルムを救済しようと政府と映画産業界に働きかけを始めた若者がいる。カンボジアではリティ・パンの Bophana

Audiovisual Center が 10 年前からクメールルージュ時代以前の映画を集め、修復する活動に着手している。Bophana ではそれらの上映やブース視聴にも熱心に動いている。

■　2013 年にプノンペンで始まり現在ヤンゴンを拠点にする「メモリー！国際フィルム・ヘリテジ映画祭」（11 月）はフランスの潤沢な資金で、アジアの古典映画の発掘と上映を続けている。ミャンマーの地方部やアジアの他都市に巡回上映もされている。

■　ラオスではオーストラリア、ミャンマーではチェコ、カンボジアではフランスの留学から帰国した若手映画人が多く、海外で得た知見とネットワークを駆使して、母国で映画製作や上映の中心に立って活動している。

**② スマホとネット、シネコン**

■　どの街にもモバイル通信会社の広告が氾濫し、スマホやインターネットが都市生活の中で存在感を示していた。ヤンゴンの市場で店番している売り子も、ヴィエンチャンのメコン川沿い遊歩道でたむろう若者グループも、スマホを地面に置いてテレビのようにして動画を見ていた。先進国同様、映像コンテンツは生活に遍在していた（少なくとも首都では）。

■　映画の製作・上映者にとって、SNS や動画サイトは、世界の映画名作、最新の技術情報、著名映画人の生の声（マスタークラスや講義録等）へのアクセスを可能にする魔法のツール。当地の皆さんは日本の同業者よりはるかに熱心に、ネットに広がる知識の宝庫の発掘と共有に励んでいた。

■　シネコンに関しては、プノンペンは現在の 22 スクリーンから、年内に新しくモールが 3 つ建ち、さらに 10 スクリーン増える予定。ヴィエンチャン（人口約 20 万人）でさえ中国系とタイ系の 2 つのモールにシネコンが 10 スクリーン。ミャンマーには韓国 CJ グループのシネコンも進出して、ヤンゴンの映画館は 12 軒となっている。シネコンは一般にインディペンデント映画と接点は薄いが、ほかに適当な上映空間がないラオスの製作者は持ち出し覚悟で利用し、カンボジアの配給会社はアクション俳優の初監督作のような新潮流映画を劇場で試していた。

■　インディペンデント映画上映の場所としてカフェ、ギャラリー、レストランのほか、フランスやドイツの文化機関、ボパナセンター（プノンペン）が活用されている。

■　昔ながらの一軒建ちの映画館はヤンゴンを例外にほぼ使用されておらず、朽ち置かれているか、限定的に（映画祭などに）貸し出されていた。

### ③ 映画祭が活発

■　映画祭が各国で 2010 年前後からスタートし映画文化の発展に大きな役割を果たしている。観客と制作者を育成し、映画の製作を奨励する。ほとんどが外国の大使館や文化機関の支援を受けながら有志個人が立ち上げており、政府の映画局の検閲や煩雑な手続きに悩まされながらも、年々観客を増やしている。特に短編やドキュメンタリーなど劇場でかける機会のない映画の重要な発表の場となっている。

■　ラオスでは毎年ルアンパバーン（12 月、2010～、東南アジア映画中心）とヴィエンチャン（3 月、2009～、ラオス短編新作の登竜門）で映画祭が開催されている。ミャンマーは短編とドキュメンタリーを上映する「ワッタン・フィルムフェスティバル」（9 月、2011～）の他、「人権・人間の尊厳映画祭」（6 月、2013～）、ヨーロッパ映画祭や LGBT 映画祭等がある。カンボジアではカンボジア国際映画祭（今年から 3 月、2009～）が年々拡大し、2017 年は 100 本近くの巨大なプログラムで開催され 2 万人の観客を得た。

■　カンボジア政府映画局は今年初めてカンボジア映画の短編映画祭を主催し、来年には長編映画祭を予定する。映画を「規制」する側だった映画局が、「奨励」する側に移行し始めたのだ。

■　今回のフェローシップはルアンパバーン映画祭に立ち寄る程度だったので実体験ではないが、映画祭のプログラム選定や運営は在住の欧米韓人が中心となっていることが多く、プロフェッショナリズムと国際的な標準は高い。上映会場や上映技術等の現場回りは改善の余地があると何か所かで聞いた。また、ほとんどの映画祭が入場無料であることを問題視する声が一部で聞かれた。

■　東南アジア域内の映画祭間交流がさかんなのが印象的。プノンペンでラオス特集を組んだり、ルアンパバーンで東南アジア映画に焦点を当てたプログラムを組んでいる。東南アジア域内の短編映画の相互上映はかなり進んでいる。

### ④ 短編から長編劇映画を目指す世代

■　映画祭で上映され受賞した短編映画を名刺代わりに、長編劇映画を目指すという流れが広がっている。ミャンマーの短編映画祭、カンボジアで今年始まった National Short Film Festival では、受賞者に賞金（一位 3000 ドル、二位 2000 ドル）を授与して長編製作を促している。

■　製作助成金を出す映画祭も増えている。ルアンパバーン映画祭は長編企画数本に総額 15000 ドルを提供し（Lao Filmmakers Fund、2013～）、「メモリー！」は１～２本目の長編

映画に取りかかろうというミャンマーの監督を国際市場に送り出す仲立ちをする（Myanmar Script Fund、2016～）。その資金源は外国のチャリティやファンドである。

■　一方で、世界の映画祭業界が求めるこのアート系映画の「流行」に乗っているのは、ごく一部の若者たちである。同じ人物の名前があちこちで見られる。短編を撮るための機材や経済的な余裕のある人たち、ある程度世界とのパイプのある国際的な視野のある人たちに限られている。特にラオスでは公務員の給料が低く、賄賂や特別なコネを通したサイドビジネスを持たないでは生活さえ厳しい。

■　ミャンマーやカンボジアの商業映画界は旧態依然として、ホラー・コメディやロマンチック・コメディのようなパターン化したジャンル映画を、国内市場向けに低予算で量産し続けている。この分野へのタイ映画業界の参入は積極的で、画面・音響の良質なタイ映画の豪華なルックを取り入れたミャンマーやラオスの合作は成功していて、今後も拡大しそうだ。

■　DVD 市場まで深く調査はできなかったが、劇場公開しない DVD 市場もミャンマーやカンボジアでは大きいようだった。

■　最近 Lao New Wave Cinema の劇映画「At the Horizon」が米国のテレビ局 HBO の RED というアジア映画チャンネルで購入された。ルアンパバーン映画祭の仲介による。

■　映像制作の技術を身につけた人材は、来訪した外国人の撮影スタッフ（映画、ドラマ、報道等）や国際事業の現地コーディネーターとして活躍している。世界の映画人との協同作業を通して学ぶことは多く、重要な収入源ともなっている。

**⑤　ドキュメンタリーの育成、上映、製作**

■　ミャンマーでは、国際 NPO「ヤンゴン・フィルムスクール」やワッタン映画祭、人権映画祭などによる長年のドキュメンタリー教育プログラムのおかげで、ドキュメンタリー制作に参入する若者が例外的に多く、すそ野が広い。軍事政権下だったからこそ世界のドキュメンタリー関係者の支援による育成事業が続いたとも言える。「ヤンゴン・フィルムスクール」では基礎教育に力を入れ、開発協力を目的とした外国のスポンサーに向けた社会教育的なテーマに特化したプロジェクトを増やし、経営の安定を目指す。この既成の枠から自由に作りたい者たちは独立した活動を始めている。

■　カンボジアでは、数年前までボパナセンターのワークショップ（フランス人の講師や技術者がサポート）で優れたドキュメンタリーが多く製作されていたが、これらパイオニア制

作者たちはフィクションに関心を移している者たちもいる。ラオスやミャンマーでもフィクションへの移行が見られる。

■　日本、韓国、欧米の文化機関が主催するさまざまなドキュメンタリー企画の提案フォーラムやワークショップは年間を通して非常に多く、一握りしかいないラオス・ミャンマー・カンボジアからの応募者は国外へ渡航する機会を得やすい。人脈、製作資金、コーチング等へのアクセスは同じ人材に集中し、作り手が増えない。もちろん、語学力とコミュニケーションスキルがハードルになっている。

■　ドキュメンタリー作品を発表する場としては外国の国際映画祭、NHK やアルジャジーラでの放送を目指すことになる。国内の公共放送局が有償でドキュメンタリーを放送することはありえない。（金を出して放送枠を買えば別かもしれない。）

■　製作資金の問題と、ドキュメンタリーの観客が国内にいないという課題。加えて、政治的に敏感、社会批判的な要素を含む作品の場合、検閲を考慮して制作者は国内上映しようとはしない。

■　ミャンマーでは民主化する前からさまざまな世界の映画を上映する地下上映会が勇気ある有志によって開催されていた。「15 年の実刑となるリスクを負うほどの映画上映とは？」――深く考えさせられる。

**⑥　政府が乗り出した**

■　ミャンマーは 2011 年に軍政が終わり、2016 年には 54 年ぶりの文民大統領が誕生した。これまで表現の自由に課せられていた規制がある程度緩んでいるのだろうが、仏教を貶めると見なされる表現には未だ厳しい。映画祭上映で Midi Z 監督の「マンダレーへの道」で仏画に鮮血がかかるショットに検閲指示が出された。一方で、新政権の与党となったアウンサンスーチーの政党 NLD では、新しく映画法を策定すべく、Thuthu Shein ら 30 代の若い映画人に草稿作成を依頼している。フランスや韓国の映画法を参考に、現在作業中である。

■　ラオスとカンボジアは政府映画局が検閲（脚本＆製作）やさまざまな許諾手続きで映画の製作と上映に規制を続けている。しかしアンジェリーナ・ジョリー監督の映画（カンボジア）など外国映画の撮影や合作の件数が増え、国際社会からの注目が高まる中、少し風向きも変わってきたという。カンボジアのフィルムコミッション熱は高まり、現在ある CFC（CEO がフランス人）に続き、政府系ほか 2 つものフィルムコミッションが新設に名乗りをあげているらしい。ラオスとカンボジアで手を組み、さらに多様な撮影現場をストックした「東南アジア半島部のワンストップ・フィルムコミッション」を目指し、外国から撮影を誘致しようという動きもある。

■　カンボジア映画局では、映像産業を拡大しようと、テレビのゴールデンタイムは自国の映像コンテンツに限定する大胆な政策を実施し始めている。（詳細は６　インタビューを参照）

**⑦ 制作者・上映者の思い、何が必要と考えているのか**

・**全般：**海外へのアクセスを可能にする英語力（コミュニケーションスキル、ネットからの情報・ノウハウ獲得）

・**プロデューサー：**技術者（カメラマンや照明技術者など）

・**映画祭主催者：**外国への渡航機会、上映用機材

・**クレイメーション制作者：**機材（撮影データを取り込むアダプター）、教える人材

・**制作者：**海外の発注事業は多く、収入源にはいいが、テーマや作り方でオリジナリティがない。海外資金を利用しながらクリエイティブ開発を促すためのプロデュース力が必要

・政府映画局の理解と協力、効率的な働きが求められる

## ６　インタビューの記録

**Souliya Phoumivong さんの話（ラオス）**

**【国立美術学院教授、クレイアニメーター】**

**外国と接点をもったことがきっかけで、映像をビジネス＆クリエイティブなチャンスに転換した中堅制作者。**

○　1982 年生まれ（34 歳）。

○　国立美術学院に籍をおき、絵画を描いていたところ、2009 年に外国人の講師による短編映画のワークショップに 3 か月参加した。講師がマックブック（機材）を置いていってくれたおかげで、さらに短編映画を作ることができた。6 年前に日本のアーティスト・レジデンシー「遊工房」に 3 か月滞在し、コマ撮りアニメーションと出会った。

○　粘土人形のアニメーションを作り始めたら、2012 のユニセフのプログラムがきっかけでラオス公共 TV に幼児教育を目的にした「My Village」という番組の製作を委託された。ひとエピソードは 5 分で、テレビ放送と YouTube 公開をしている。現在もシリーズ 4 が続いている。「基礎教育」「リテラシー」を意図したクレイメーション。

○　ラオスではインターネットで動画等アクセスあるのは一部の階層のみ。地方に行って少数民族の子どもたちが My Village の登場人物たちをよく知っていると知らされ、すごくうれしかった。テレビの公共性・全国網に感謝する。
○　オーストラリア政府系ファンドから「My Village」に類似した仕事の発注を受け、2 月にはシンガポールで自由な創作をするレジデンシーに行くことになり、とにかく今は忙しい。
○　収入になるので助かるが、時間がない。クレイメーションは学生たちにノウハウを継承するため、自宅に隣接したスタジオを建て、住み込みしてもらいながら家族のように制作している。現在は自分の学生ひと学年 60 人のうち 35％がワークショップに参加している。
○　人形を作り、撮影し、声は自分たちで（車の中などで）収録する家内工業だが、音楽はラオスのプロの音楽家に依頼している。
○　このアニメ制作が話題になってから、DK Art というグループから「ラオスで初めてのコマ撮りアニメは自分たちだ」と訴えられたが、50 歳以上の高齢世代で自分たちとは断絶がある。
○　外国に渡航する機会を得て「その日暮らしではなく、自分に投資して未来を自ら作ることを学んだ。「自分の髪を切れない理髪師」「自分の家が粗末な大工」にはなりたくない。次こそは自分のための作品づくりをしたい。そのために収入があるのは助かる。」
○　公務員の給料はあまりに少なく、車も買えない。一人ならともかく、家族は養えない。妻も 30 年働き続けてようやく有給休暇がもらえた。自分は「My Village」の仕事が大きな収入となり、町中にある家の他に地元で新しく家やスタジオを建て、親族にレストラン経営を始めさせ、農地を買って人に貸した。洋館のような家と庭園は結婚写真や CM の撮影地として貸出しもしている。子どもの頃はご飯のおかずがない貧しい時代だったが、自分の息子には不自由をさせていない。好きなことをさせてあげたい。
○　若い人は実験的な作風など世界の流行を真似するかもしれないが、30 代半ばの自分にとっては、食べていくことが大事。昔のアーティストは寺に入って仏画を描くしか職がなかったが、写真やアニメーション（動画）は収入になる仕事となった。学校でも教える学部がスタートし、芸術学院を卒業する若者たちの未来が明るくなった。

**U Chit Swe さんの話（ミャンマー）**
**【ミャンマー映画協会　事務局長】**
Myanmar Motion Picture Organization
**商業映画の製作者連盟の事務方として、長い歴史を誇る組織の全体を見渡す。**
■会員 6000 人（俳優、監督等）スタッフ 29 人
■活動資金：検閲登録費、カレンダーの販売、サッカー大会の収益金、会員会費（5 ドル）

■ミャンマーのアカデミー賞を主催している
■事務局長は 1966 年（当時は郵便物を整理配達する仕事）からのたたき上げスタッフで、若い頃は映画を一日 4 本見ていた
■74～86 年頃の映画が好きで、ストーリーテリングの技法とアート的な視点がよかった
■今の映画は儲かればいいという発想で作られている
■旧事務所は近く博物館にする予定
■1974 年は 100 本以上が製作されていた時代もあった
■2005 年頃に携帯電話が入って来た、当時一台 4000 ドルした。政治家が役人に配って流行した。2011 年のアウンサンスーチー自宅前スピーチではとにかくスマホで写真を撮る人ばかりの普及。

**Sin Chan Saya さんの話（カンボジア）**

**【文化芸術省、映画・文化発信局　局長】**

Director, Department of Cinema and Cultural Diffusion, Ministry of Culture and Fine Arts

**映画を国の発展のひとつのツールとみなし、世界とつながる新しい行政を目指す役人。**

■ 2016 年に情報省と文化芸術省で、映画の質を改善するにはどうしたらいいか？と検討した。7-9pm のテレビのゴールデンタイムは、カンボジア製作のドラマのみと決定。政府が製作費を保証する。17 チャンネル×毎日 2 時間という膨大なコンテンツ量。
■ 現在は人材不足。ライターと演出家の質が問われる。育成が必要。
■ テレビ局は CM に年間 1 億ドルの収益をあげているが、クメール語コンテンツは CM が取れない（ので、補助する必要がある）。
■ 最大予算でテレビのひと枠は 3000 ドル。これでは自国製作より海外コンテンツを購入する方向に流れる。
■ だからコンテンツの輸入に関税をかけ、その税収をカンボジアの芸術文化の支援に回す制度を法制化した。
■ 人材育成のために映画学校やワークショップを立ち上げ、民間と王立芸術大学の共同運営にする。海外留学しなくても才能ある人が国内で学べるようにする。

■ 若い人の支援のために第一回カンボジア・ナショナル・ショート・フィルム・フェスティバルを主催した。若者の映画製作を促し、経験を積んで切磋琢磨してもらうように。賞金も用意（トップ 3000 ドル、次点 2000 ドル）した。

■ 次は長編のナショナル映画祭をやりたい。

■ カンボジアの映画興行について：

・公開される映画の 5 本に 1 本はカンボジア映画。

・2016 年に 41 本の長編映画が製作された。外国から輸入されたのは 200 本以上。

・映画館はプノンペンに 5 軒（22 スクリーン、6500 席）、シエムリアップに 2 軒。今年は映画館が増える予定（モールが 3 つ以上増え、10 スクリーンが増す）。

・観客動員数は 300 万人（カンボジアの人口は 1500 万人）うち 100 万人が 41 本のクメール映画を鑑賞、200 万人が 200 本の外国映画を見た。

・国内の市場規模が小さいから、製作費が伸びない。平均製作本数は 2〜3 万ドル。

・2016 年の観客数は前年比 10％の成長。

・しかし映画の質と一作品の公開日数の伸びが足りない。カンボジア映画 41 本のうち半数は赤字だった。

■ カンボジアの観客はミックスジャンルの映画を好む（コメディ、アクション、ホラーを混ぜたタイプ）誰もが楽しめるものが求められている。

■ 映画の質とは？　①映画技術　②カンボジアらしい文化を映し出すこと

■ これまでのカンボジア映画はどこかのコピーだった。外国映画の真似ばかりしている。クメールの古来からのアイデンティティを映像に反映してほしい。

■ 例えばクメール語のセリフが英語や中国語から直訳的な表現で不自然だと思う。

■ ドキュメンタリーについて：近年あがってきている。作り手の人数はまだ少ないのは、上映する場所がないから。外国の映画祭でしか上映されない。テレビ局は放送権利料を払わない。

## 7　フェローシップを終えて

社会主義体制・軍事政権下の監視・管理が厳しかった映像業界が、いま新しい時代を迎えようとしている。人材の若さ、最新のコミュニケーション・ツールを駆使できる技術力、世界とのパイプとなってくれる外国人との協同力に、目の見張る可能性を強く感じた 6 週間だった。

世界最先端の映像文化が手元のスマホでアクセスできる時代、自民族の言語文化からも、昔ながらのホラー・コメディに限らないさまざまなタイプの映像作品を生む土壌、求める市場が芽吹きだしている。

ドキュメンタリー分野はまだ小さく狭いが、社会奉仕事業や PR 映像の「請負業」を抜け出たインディペンデント映画を意識する制作者も出てきている。検閲規制の「政治」の要請、外国が求める途上国映画の型の「経済」の要請。そのどれからも自由な自分らしいオリジナリティを獲得した作品が待ち望まれる。

その才能の発掘と同時に、観客の育成が、各地の映画祭の尽力によって着実に推し進められている。

プノンペンでは 1 月、タイのアピチャッポン・ウィーラセタクンの特集上映がフランス文化センターで開催され、監督が初来場を果たした。会場は連日いっぱいで、多くの若者がグルーピーのように熱に浮かれていた。表現の自由をめぐる質問に対して、アピチャッポンは答えた。「警察国家・軍事国家では、映画はプロパガンダ、つまり「正しい」思想に奉仕するためにあると考えられている。権力者の訴求するメッセージとしてではなく、フィルムメーカーの作りたいものこそが力を持つと自分は思う。」

今後も引き続き、現地で得た友人たちと協働プロジェクトを企画するための話し合いを重ねる。4 月末に来日するカンボジアのドキュメンタリー制作者リダ・チャン氏を囲む上映会企画をはじめ、ラオス・ミャンマー・カンボジアのドキュメンタリーの製作・上映・保存・普及を支援する事業を構想し始めている。

## 8　主要訪問先・URL

| | | |
|---|---|---|
| **Laos** | Luang Prabang Film Festival | www.lpfilmfest.org/ |
| | Vientianale Film Festival | www.vientianale.org/sabaidee/ |
| | Japan Foundation Asia Center Vientianne Liaison Office | https://www.facebook.com/JfacVt/ |
| | Lao New Wave Cinema | https://www.linkedin.com/company/lao-new-wave-cinema-productions |
| | National University of Laos, Faculty of Letters, Dept. of Lao Language and Mass Communication | http://fol.edu.la/department/1-lao-language-and.html |
| | National Institute of Fine Arts | Khoubulom Rd, Vientiane 0100, Laos |
| | JICA Laos Office | https://www.jica.go.jp/laos/office/ |
| | Regal Blue Production | https://www.facebook.com/pages/Regal-Blue-Production/241944799157688 |
| | 映画「ラオス　竜の奇跡」 | http://www.saynamlai.movie/ |
| **Myan-mar** | Watthan Film Festival | http://www.wathannfilmfestival.com/ |
| | Yangon Film School | http://yangonfilmschool.org/ |
| | New Zero Art Space | http://www.newzeroartspace.com.mm/ |
| | Myanmar Motion Picture Organization | https://www.facebook.com/Myanmar-Motion-Picture-Organization-%E1%80%BB%E1%80%99%E1%80%94%E1%80%B9%E1%80%99%E1%80%AC%E1%82%8F%E1%80%AF%E1%80%AD%E1%80%84%E1%80%B9%E1%80%84%E1%80%B6%E1%82%90%E1%80%AF%E1%80%95%E1%80%B9%E1%80%9B%E1%80%BD%E1%80%84%E1%80%B9%E1%80%A1%E1%80%85%E1%80%8A%E1%80%B9%E1%80%B8%E1%80%A1%E1%82%90%E1%80%AF%E1%80%B6%E1%80%B8-496004583744860/ |
| | Human Rights Human Dignity International Film Festival | https://www.hrhdiff.org/ |
| | Japan Culture House | https://www.facebook.com/jch.yangon/ |
| **Thai-land** | Film Archive (Public Organization) | http://www.fapot.org/en/home.php |
| | Asian Culture Station, Chiangmai | http://www.asianculturestation.cac-art.info/ |
| | The Japan Foundation, Bangkok | http://www.jfbkk.or.th/ |
| | Documentary Club | https://www.facebook.com/pg/DocumentaryClubTH/about/?ref=page_internal |

| | | |
|---|---|---|
| | Rumpai Loft Habitat | https://www.facebook.com/rumpailofthabitat/ |
| | I Hate Pigeons | https://www.facebook.com/ihatepigeonsbangkok/ |
| **Cam-bodia** | Bophana Audiovisual Resource Center | http://bophana.org/ |
| | Meta House | http://www.meta-house.com/ |
| | Institut Francais Cambodge | http://institutfrancais-cambodge.com/en/presentationifc/ |
| | Cambodia Film Commission | http://www.cambodia-cfc.org/site/index.php |
| | Department of Cinema and Cultural Diffusion, Ministry of Culture and Fine Arts | http://cambodiafilm.gov.kh/ |
| | Japan Foundation Phnom Penh Liaison Office | https://www.facebook.com/asiacenter.phnompenh/ |
| | Cambodian Living Arts | http://www.cambodianlivingarts.org/ |
| | FiLKHMER Studio | http://www.filkhmer.com/ |
| | Puprum Entertainment | https://www.facebook.com/pg/PuPrumPage/about/ |
| | Kon Khmer Koun Khmer | https://konkhmerkounkhmer.wordpress.com/about/ |
| | Meatochak Film Production | https://www.facebook.com/meatochakfilm/?ref=nf |